石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第407号　平成29年9月1日発行

加賀市文《群鹿図》左隻　佐々木泉景　実性院蔵　―北陸ゆかりの画聖Ⅱ―

特別陳列 北陸ゆかりの画聖Ⅱ

特別陳列 前田家の名宝Ⅱ

鴨居玲 ―酔って候―

秋の優品選【近現代絵画・彫刻】

秋の優品選【工芸】

国宝《土佐日記》藤原定家　前田育徳会蔵
―前田家の名宝Ⅱ―

- 展覧会回顧「よみがえった文化財」
- 企画展Topics「燦めきの日本画」
- ９月の企画展示室・行事予定
- ミュージアムレポート「夏休み鑑賞講座」
- 文化財現地見学 参加者募集
- アラカルト　ただいま展示中

第2展示室

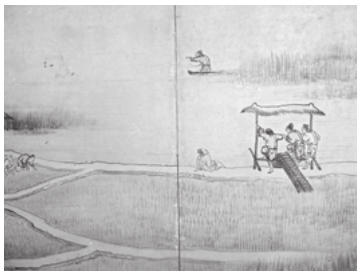
特別陳列

北陸ゆかりの画聖Ⅱ

8月31日（木）～10月2日（月）　会期中無休

「北陸ゆかりの画聖」Ⅱ期では、久隅守景、岸駒そして佐々木泉景を取り上げます。このうち守景はⅠ期に続いてとなりますが、Ⅱ期では《猿廻し図》と県文《四季耕作図》を展示します。《猿廻し図》は、室町時代以降の狩野派による「四季耕作図」で冬から春の場面にしばしば描かれてきたものを継承して、正月の掛物として単独に描いたものです。小品ながら、「雪舟に伯仲する」とまで高く評価された守景の水墨画の技量が遺憾なく発揮されています。また《四季耕作図》は、中国風俗による一連の制作の最終段階に位置付けられるものです。画面に注目すると、農具の描写は無頓着なうえに、禅の祖師像のパロディーかと思われる人物が描かれるなど、守景の遊び心があふれています。ここから、自然と一体となって生きることが究極の智慧であり、喜びであるとする守景晩年の名作に共通した思想を読み解くことができます。

続く岸駒では、《兎福寿草図》と県文《伯陽図》、県文《虎図》を展示します。まず《兎福寿草図》は京都に上って間もない一七八二年の作で、画中に中国・明時代の花鳥画家、呂紀の筆法に倣うと自ら記しています。恐らく岸駒は京都で成功するには、室町時代から広く愛好されてきた画家の筆法にも精通していなければならないと考えたのでしょう。そうした努力の成果が認められる作品です。岸駒といえば虎が中心的な画題ですが、この点については八ページの「アラカルト」をご覧ください。そして《伯陽図》は、「越前守岸駒」の落款から一八三七年から没年となる一八三八年に描かれたことがわかります。九十歳になろうとする年齢で、大画面を手掛けることは容易ではなかったと思われますが、それまでの画風とは異なる、達観した境地が感じられます。



県文《四季耕作図》左隻部分　久隅守景

県文《伯陽図》　岸駒

学芸員の眼

名作を対比して鑑賞することは、展覧会の醍醐味のひとつかもしれません。巨匠たちの「対決」をコンセプトとした展覧会が開催されたのも、記憶に新しいところです。今回はそうした趣旨で作品を選定していませんが、岸駒の《虎図》の隣に佐々木泉景の《群鹿図》（加賀市文）を展示したのは、結果として「対決」とまではいかないまでも、「競演」くらいの言葉を当てはめても良いでしょう。泉景は岸駒より二十四歳若いのですが、岸駒と同じように京都で研鑽を積んでいます。そして、一八〇九年にこの両者は金沢城二之丸御殿に障壁画を描いています。画家の選定をした加賀藩には、技量を競わせるという意図があったことでしょう。今回の展示では、両者が生きた時代や影響関係を改めて認識することができます。

前田育徳会尊経閣文庫分館
特別陳列
前田家の名宝Ⅱ

8月31日(木)～10月2日(月)　会期中無休

「前田家の名宝」Ⅱ期では、国宝《土佐日記》を展示します。本作は、紀貫之の『土佐日記』を、文暦二年(一二三五)に藤原定家が書写したものです。当時、京都蓮華王院(本堂が三十三間堂)の宝蔵には貫之の自筆本『土佐日記』が伝わっており、それをもとに定家が手写しました。奥書の前に、定家が貫之の筆跡をまねた臨模の部分があり、これにより今は伝わらない貫之自筆本の内容復元が可能となるという意味でも、本作は仮名や書蹟の歴史研究上で貴重な資料といえます。

綴葉装(てつちょうそう)による枡形本の体裁で、表紙には名物裂の「富田金襴」を用い、見返しは金銀の型摺で籬に夕顔の図があしらわれています。伝来については詳しくわかっていませんが、江戸時代に入って連歌師の玄珍が所持していたものを、前田利常が所望して入手したようです。寛永六年(一六二九)の将軍徳川家光・前将軍徳川秀忠の本郷邸御成の際には、本作が屋敷二階の書院に飾られました。

その他今回は、Ⅰ期の周文に替わり雪舟筆と伝えられる重文《四季花鳥図》を、中国・明時代の画家、王若水の《花鳥図》とともに展示します。雪舟は、中国の大画面による花鳥画に影響を受けたと指摘されていますが、たとえばこの両者の鶴の描写には共通する点があるようです。また重文《餝太刀(かざりたち)》も、平安時代後期の工芸技巧を駆使した名品として改めてご注目いただきたい一口です。

重文《餝太刀》平安時代12世紀　前田育徳会蔵

第3展示室
鴨居 玲 ―酔って候―

8月31日(木)～10月2日(月)　会期中無休

鴨居の命日九月七日を含む期間に、ほぼ毎年特集鴨居展を行ってきました。今回は「酔って候」をサブタイトルに所蔵品を中心に開催します。人物を描き続けた鴨居ですが、頭から足先まで、全身を描いた作品はそう多くはありません。大半はバストショット、胸から上です。女性の全身像では《エチュードA》や《望郷を歌う》などが思い浮かびますが、足は描かれていません。首吊り男の《夢候》では足は描いても空中に浮いています。地面に立つ人物は鴨居の創作対象とはならなかったようです。

さて、新聞記者だった鴨居の父は大変に酒が好きで、「われ死なば　酒屋の壺の下に埋めよ　もしや滴のたれもせぬかと」と詠ったほどですが、鴨居も劣らずの酒家でした。作品にも数多くの酔っ払いが登場します。

《酔って候》は鴨居の死の前年、一九八四年の作ですが、自画像といっていいでしょう。ちびた煙草はパイプ、酒瓶はサーベルの柄、泰然とした姿は王侯貴族の風格です。しかし、戯画化された足に目をやると、一気に興は冷め、年老いた孤独な酔っ払いにすぎないのだと知るのです。ぐにゃりと曲がった足では、まともに立ったり歩いたりはできません。足を隠した女性像、首吊り男、酔っ払い、皆地に立つことを拒んでいるかのようです。それは出生地も生年月日も曖昧にし、頻繁に住居を移した鴨居の生き様と繋がるものではないでしょうか。

「朝、アトリエに入って昨日描いた絵と向き合うのが怖い」と鴨居は語りました。夜、何物かに取り憑かれて筆を進め、翌日冷静な目で向き合い、もしも……だったらと思い悩むのです。美に酔い痴れ身を削って描き続けた鴨居の自死は一九八五年九月七日の早朝でした。

鴨居玲　《酔って候》

第4展示室［絵画・彫刻］

秋の優品選

8月31日（木）～10月2日（月）　会期中無休

第四展示室「秋の優品選」では、館蔵品を中心に、洋画と彫刻の優品をご覧いただきます。

洋画部門は主に風景作品をご覧いただきます。居ながらにして各地の風情を目にすることができる風景画は、既知の地であれば思い出を呼び覚まし、未踏の地であれば想像を膨らませ、あれこれと画面の中を散策し、時にはにおいや音すらも感ずることがあります。

作品は、池田良則《廃園》（メキシコ）、奥田憲三《中世の町》（イタリア）、高光一也《チュールリー公園にて》（フランス）、滝川巌《オレンジの樹》（スペイン）、竹沢基《アッシージの丘》（イタリア）、田辺栄次郎《ティチーノ寸景》（スイス）、谷昭二《カタルーニャの松》（スペイン）、富田祐夫《ローテンブルク》（ドイツ）、藤本東一良《コンカルノのバルコン》（フランス）、村田省蔵《午後の町》（メキシコ）等。カッコ内は描いた国です。絵画による世界旅行をお楽しみください。

彫刻部門では人体彫刻の優品を中心に展示します。吉田三郎《山羊を飼う老人》は、筋骨逞しい男性像を得意とした作者の代表作の一つで、老人と二頭の山羊との群像です。本品は人生の年輪を感じさせる深い彫りと味わいを漂わせています。畝村直久《和》も作者の代表作の一つで、三人の裸婦の群像という大作で、作品は三体の個性とフォルムの調和がテーマとなっています。両作品とも、これからの実りの秋を迎えるに相応しい、豊かさと共にしみじみとした充実感や深さを感じさせる作品といえましょう。

竹沢基　《アッシージの丘》

第5展示室［工芸］

秋の優品選

8月31日（木）～10月2日（月）　会期中無休

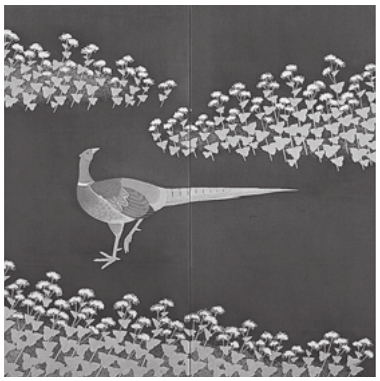
工芸の展示室では、所蔵作品のなかから、秋を感じさせるモチーフやテーマの作品を中心にご紹介します。

展示室へ入る時、最初に目に付く壁面ガラスケースの先頭には、談議所栄二《秋》を展示します。本作品は、二曲一隻の染屏風で、第十二回日展出品作です。風に揺れる女郎花の中、ふと何かに耳を澄ませるように足を止めて振り返る雄の雉の姿が染め出されています。本作品は、今年度の友の会会員カードのデザインに使用しました。そして《雉》にちなみ、今回の染織作品は鳥をモチーフとした秋らしい作品を選んでいます。堀友三郎《鳥の家族》、羽田登喜男《友禅訪問着「群鴦錦秋」》などをご覧いただきます。

また、美術館でお月見気分を味わっていただければと思い、角野岩次《残月》や富本憲吉《竹林月夜図皿》、関源司《月に雨》など、月をテーマとした作品も選びました。季節や時間によって異なる表情をみせる月をイメージしながらご覧いただければと思います。

その他、竹田有恒《釉裏金彩穂波文鉢》や硲三彩亭《九谷呉須上絵大皿「アルバニアの案山子」》、松村昌子《青釉花瓶「実り」》など、豊穣の秋を感じさせる作品もあります。

染織、漆工、陶磁、金工など、多様なジャンルの作品において、秋の喜びや美しさがさまざまに表現されている様子をお楽しみいただけるかと思います。



談議所栄二　《秋》

展覧会回顧

石川県文化財保存修復工房設立20周年記念

よみがえった文化財

―加賀藩による文化財修復の歴史と石川県文化財保存修復工房のわざ―

石川県文化財保存修復工房設立二十年を記念して、これまで積み重ねてきた修復実績をその作品で紹介するとともに、なぜ石川県が修復工房を設立するに至ったのか、その大きな要因は加賀藩の文化政策に求めることができますが、そうした視点から当地の文化土壌を検証する展覧会でもありました。第一章では、最初に国宝でユネスコ世界記憶遺産の「東寺百合文書」の特別公開にはじまり、次に前田育徳会の修復作品とともに保存修復に関連する文書を初公開しました。書跡典籍の収集に意を注ぎ、学者大名と称された五代藩主前田綱紀は、書物保護のために修復や収納箱の作製を行っています。「東寺百合文書」は、綱紀が書櫃を百箱作製し寄進したことによる名称ですが、こうした綱紀の文化財保護の思想は今日の文化財行政の先駆けといえるものであり、朱子学の本質的解釈に基づくものでした。第二章ではこうした歴史から誕生した修復工房の実績を、屏風や掛軸、古文書などの主要修復作品で紹介しました。多数の鑑賞者から文化財を守るための繊細で高度な技に深い感銘を受けたという声をいただきました。一方では「もっと修復過程を知りたかった」という要望がありましたが、展示室では修復を終えて輝きを取り戻した作品の鑑賞に主眼を置きました。修復過程については図録や映像、そして何より今回の展覧会では、全国で唯一修復作業を常時公開している修復工房で、実際に作業をご覧いただくことが目的でもあったことを付け加えておきます。

最後になりましたが、快くご出品いただきましたご所蔵者をはじめ、（一財）石川県文化財保存修復協会の皆様にあらためて感謝申し上げます。

企画展Topics

「燦（きら）めきの日本画 ―石崎光瑤と京都の画家たち―」

九月二十三日からの本展開催に先立ち、八月三十一日より第六展示室において「石川と京都」と題した序章を設けました。石川の日本画は京都との関係が深く、それを見過ごすわけにはいきません。ここでは石川出身の紺谷光俊や池田瑞月らが、京都へ学びに出た様子を紹介するとともに、垣内雲嶙ら四条派の画人が、石川の日本画家に与えた影響を紹介します。また、時代は少し下がりますが、京都の絵専に学んだ原田太乙や画塾青甲社に学んだ安嶋雨晶、さらには戦後京都画壇の重鎮西山英雄までご覧いただくことにより、石川の日本画について理解が深まるものと思います。この展示は「燦めきの日本画」本展が終了した後の、十一月七日まで長期展示する予定となっています。

本展の終章では、石崎光瑤や同年代の土田麦僊、村上華岳らが、次世代の日本画家たちに与えた影響について見ます。なかでも注目いただきたいのは、石崎光瑤の《燦雨》（一九一九）から直接影響を受けた上村松篁が描いた《燦雨》（一九七二）です。上村松篁は花鳥画において独自の画境をひらき、母の上村松園につぎ、文化勲章を受章した日本画家です。本作について松篁は「七十歳にして初めて私も石崎先生と同じ燦雨をしかも同じ題材、火炎木と印度孔雀とスコールを描いた。五十年間も胸の中で温めていたモチーフであった。」と述べています。時を経て描かれた二人の作家による《燦雨》をご覧ください。

上村松篁　《燦雨》　昭和47年　松伯美術館蔵

第7～9展示室

第4回 日展石川会展

9月1日(金)～9月10日(日)　会期中無休

日展石川会は、県内在住の二人の日本芸術院会員を初めとする日展所属の作家で構成されています。平成二十三年以来四回目となる今展は、昨秋東京の国立新美術館で開催の改組 新 第三回日展に出品された大作を中心に百数十点を展示します。

◆入場料　八〇〇円(高校生以下無料)
友の会は一〇〇円引き

◆連絡先　北國新聞社事業局内「日展石川会」事務局
電話 〇七六－二六〇－三五八一

第7～9展示室

第27回 北國水墨画展

9月14日(木)～9月18日(月・祝)　会期中無休

石川県内の水墨画愛好家団体を網羅した統一展です。近年愛好者の増加と作品の向上が著しい県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査します。入選、入賞作に委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力を伝えるものです。

◆入場料　一般・大高生　五〇〇円(四〇〇円)
(　)内は前売料金 中学生以下無料

◆連絡先　金沢市南町二番一号
北國新聞社事業局内
「第二十七回 北國水墨画展」事務局
電話 〇七六－二六〇－三五八一

ミュージアムレポート

夏休みに「ご家族で作品鑑賞を!」と願って設けている『アートdeまんぷく』の展示室。その展示室を楽しむキッズプログラムが、七月十六日に行われました。展示室の紹介では「どんな作品だと思う?」と親子で話合う場を設け、そのことから「作品鑑賞が楽しかった」というご意見をたくさんいただきました。この日は三連休の二日目、そして、小・中学生対象の出世街道のスタンプ対象講座ということで、今までにないほどのたくさんの参加者で賑わいました。その様子はご参加の方の「すきなたべもの」でカラフルに彩られた、当館2階のコレクション展示室受付前の大きなガラス窓で感じて頂けることでしょう。

9月の行事予定

■百万石の文化講座　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料

10日(日)	第一講　加賀前田家に伝来した文化財 ―前田育徳会蔵 国宝 土佐日記を中心に―	菊池浩幸氏 (公財・前田育徳会文庫員)

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

2日(土)	石川の文化財5	谷口　出　学芸第一課長
16日(土)	小倉色紙と利休の茶	高嶋清栄　修復工房次長
23日(土)	日本の油絵 ―人物	二木伸一郎　普及課長
30日(土)	読む京都画壇 ―画家たちのことばから―	前多武志　学芸専門員

■映像ギャラリー　午後1時30分～　美術館ホール　入場無料

3日(日)	「現代の12人の巨匠が語る　日本画の心」(60分)
17日(日)	「世界・美の旅　ベラスケス～素顔の宮廷画家～」(30分) 映画「漆かき」(30分)

第48回 文化財現地見学 参加者募集！

期　　日／平成29年10月21日（土）～22日（日）　1泊2日
参加料金／友の会会員　31,000円　　会員以外　32,000円
応募締切／平成29年9月15日（金）必着

日程／出発 十月二十一日 午前七時
　　帰着 十月二十二日 午後七時過ぎ
発着／金沢駅 金沢港口（西口）団体バス乗り場
※移動は全て貸切バスを使用します。
※宿泊はお一人様一室（シングル）となります。

◆見学地

【白鶴美術館】
展覧会「白鶴美術館の中国陶磁器Ⅰ―明時代作品を中心に―」を、学芸員の方にご解説いただきながら鑑賞します。東西のスタイルが融合したハイカラな建築も見どころです。

【香雪美術館】
展覧会「利休と剣仲」（仮）を鑑賞します。学芸員の方に、館の概要をご解説いただき、自由に見学します。

【兵庫県立美術館】
「大エルミタージュ展」を鑑賞します。展覧会の概要をお聞きした後、自由観覧となります。安藤忠雄設計の現代的な建築が、港町神戸の雰囲気と調和しています。

【浄土寺】
浄土堂（国宝）に安置された快慶作の《阿弥陀如来及両脇侍立像》（国宝）を、ガイドの方のご説明を聞きながら拝観します。

【篠山城大書院】
篠山藩五万石の拠点であった篠山城。平成十六年に再建された大書院を、ガイドの方のご説明を聞きながら見学します。

【丹波古陶館・篠山能楽資料館】
平安時代からの歴史を持つ丹波焼、そして丹波猿楽と近世城下町に育まれた能楽文化を、学芸員の方のご解説を聞きながら堪能します。

◆申込方法

往復はがきに「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・電話番号・会員番号を記載のうえ、ご応募ください。定員四十二名、応募者多数の場合、抽選になります。

◆あて先

〒九二〇－〇九六三　金沢市出羽町二－一
石川県立美術館「文化財現地見学」係
※行程に徒歩移動や坂道、階段が含まれます。
脚に不安のある方はご注意ください。

10月以降の土曜講座

月／日	タイトル（予定）	担当
10月14日	加賀象嵌と高橋介州	中澤
11月18日	白山開山1300年 白山信仰の祭礼と能面について	村上
12月2日	前田綱紀「百工比照」の思想	村瀬
12月9日	素材と彫刻・彫刻と色彩	北澤
12月16日	百工比照の研究と新村撰吉	有賀
1月6日	友禅 ―歴史と現在―	寺川
1月13日	美術鑑賞について	深山
1月20日	絵画の見方 ―材質と形態	中澤
1月27日	近代日本画 筆法見てくらべ	前多
2月3日	琳派の草花図をめぐって	有賀
2月10日	木村雨山の図案とスケッチ	寺川
2月24日	中国の茶書を読む1 ―『茶経』―	村上
3月3日	石川の文化財6 白山ゆかりの文化財	谷口
3月10日	近代日本と彫刻	北澤

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.23

石川県指定文化財《虎図》とらず 紙本金地墨画　六曲一双のうち右隻

縦154.5×横355.8cm　江戸19c

岸駒 がんく

寛延2～天保9年(1749～1838)

(右隻)

虎をモティーフとした作品は、岸駒(がんく)そして岸駒を祖として江戸後期から明治期にかけて活動した日本画の流派である岸派の定番として数多く描かれています。岸駒の出生については不明な点が多く、生年を一七四九年と一七五六年とする説があり、出生地も石川県金沢説と富山県東岩瀬説があります。厳しい少年時代を過ごしたと思われ、加賀藩の史料によれば十二歳の頃金沢の染物屋に丁稚奉公し、二十五歳で京へ上ったようです。この時期、円山応挙から指導を受けた可能性が指摘されるなど、応挙の画風から強い影響を受けています。そして一七八四年に有栖川宮家御学問所の障壁画を描き、有栖川宮の近習(きんじゅ)となり雅楽助(うたのすけ)の名を賜ったことにより、一流の画家としての地位を確立します。

一七九九年に長崎の通詞(つうじ)を通し、清人から実物の虎の頭骨を入手し、それを徹底的に写生するとともに、同年ミイラ状の虎の足四本も入手して解剖学的なレベルまで虎の研究を深めます。本作は金地の大画面に墨画で描くという、岸駒の虎図としては比較的珍しい作例です。モティーフを限定して動と静の対比を鮮明に打ち出しており、「越前介岸駒」との落款から、一八〇八年以降の晩年の作であることがわかります。

次回の展覧会

平成29年10月6日(金)
～11月7日(火)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第２展示室
百工比照Ⅰ	石川の文化財

第３・６展示室	第４展示室	第５展示室	１Ｆ企画展示室
額から出た絵画 台座から降りた 彫刻たち	優品選 －絵画・彫刻－	高橋介州と 加賀象嵌のあゆみ	燦めきの日本画 －石崎光瑤と京都の画家たち－ 9月23日(土･祝) ～10月22日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(9月は4日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

9月は無休で開館しています

ガン保険
チューリッヒ生命「終身ガン治療保険プレミアム」
通院治療が増加している時代の、画期的なガン保険
今、ガン保険にご加入されている方も、ご加入されていない方も今すぐチェック!
通話料無料
0037-6001-64320
既にガン保険にご加入されている方に
追加のご加入で、ガンの通院治療の保障を充実
●主契約:放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)
●保険期間・保険料払込期間:終身
月払保険料 1,500円 35歳男性
月払保険料 1,500円 43歳女性
広告有効期限:2018年3月30日　募補16004-20160112
受付時間:10時～19時(日曜定休)
※一部の固定電話から繋がらない場合がございます。恐れ入りますが携帯電話等でおかけ直しください。
ZURICH チューリッヒ生命
ガン保険にご加入されていない方に
自由設計プランで、ガンの通院治療と診断給付金と先進医療まで備える
●主契約:放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)
●特約:ガン先進医療給付金、ガン先進医療支援給付金(一括15万円)、ガン診断給付金(一括50万円)、悪性新生物保険料払込免除
●保険期間・保険料払込期間:終身
40歳男性
月払保険料 3,216円
広告
《募集代理店》
株式会社ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング
〒160-0022　東京都新宿区新宿5-17-18
※記載の保険料は2015年7月現在のものです。※この欄は商品の概要を説明しています。商品の詳細については、パンフレット、ご契約に関する注意事項(契約概要、注意喚起情報)等をご確認ください。

石川県立美術館だより
第407号〈毎月発行〉
2017年9月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/